



TITLE:

<雑録>僮僕都尉

AUTHOR(S):

羽田, 明

CITATION:

羽田, 明. <雑録>僮僕都尉. 東洋史研究 1939, 5(1): 76-76

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145657>

RIGHT:

僮 僕 都 尉

蒙古の西侵は、蒙古史からみても、東西交渉史からみても、大に注目すべき重大事件である。所が、これの研究には、支那側史料のみには頼れず、西アジアや歐洲の史料を參照利用することがどうしても必要となつて來るのであるが、その事の厄介さのためか、わが國の學者によつてこの問題がとり上げられたことは極めて稀であつた。これは、わが國の學者の怠惰と云つて云へないこともないが、複雑廣汎な様相をもつ蒙古史なり、東西交渉史なりの研究には、實に多種多様の史料を駆使することとを必要とし、一人の學者があらゆる種類の史料をことごとく根本史料にまで溯つて研究を行ふことは、まづ不可能と言つてよく、當然、研究の分擔がなされねばならないわけでもあり、またわが國では、自由に利用することの容易でない史料もあり、自然、わが國の諸先輩の研究は、東方の史料に重點を置いたものとなつてゐたから、西方の史料に依る研究の振はなかつたのは已むを得ない事でもあつた。けれども、蒙古史、東西交渉史が東方の史料だけで濟ませるものでないことは、明かなことで遅かれ早かれ、西方史料の利用が始められねばならなかつた。いま、これが斯學を專業とせず、自らは一ペダンティストと謙遜する外交官によつて手が着けられたのである。わが國の東洋學の研究に、一の新生面を拓いた本論文の出現を、われわれは大きな喜びを以て迎へる次第である。

(藤枝 晃)

匈奴帝國が天山南路、漢史の所謂西域を支配するに當つて、僮僕都尉なす官を置いて賦税の事務を司らしめた、と云ふ傳へは漢書西域傳に見え、周知の事實であるが、匈奴に限らず一般に遊牧民族が奴隸賣買を以て主な生業の一としたと云ふことからして、此の官名の由來を説くことも出來さうである。

併し此説の當否に關しては參考すべき重要な事例が存する。

清初準噶爾部が昂吉と云ふ官を設け回部の租賦を徴せしめた時のことを記して、西域聞見錄卷五に、回子各城及左右哈薩克。皆其阿拉巴圖也。と云つてゐる。阿拉巴圖は勿論蒙古語 *alban* の複數に相違なく、租税、被課税地(民)の意味であるが、聞見錄には、華言猶奴僕也。と注してゐる、據つて思ふに僮僕とは被課税民としての奴僕の謂ひではなからうか。*alban* と云ふ語は十二世紀より十四世紀に亘る畏吾兒文書中に用ひられてゐるのが初見で、此の場合元來の土耳其語であるよりも寧ろ蒙古語からの借用らしいが、それにしても *alban* (取ル)の *phoneme* は廣く蒙、土兩言語に共通のものとして、兩言語の起原に遡り得べく、匈奴が蒙、土何れの人種に屬するにしても、此らの言語の保守性より見て、僮僕が *albat* 乃至その類似語の譯である蓋然性は極めて多いと考へられる。

(羽 田 明)